



ワグナー・死・不死

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-07-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 伊藤, 嘉啓 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00010010

ワーグナー・死・不死

伊 藤 嘉 啓

(一) フォイアーバハ

ワーグナーがフォイアーバハ (Ludwig Feuerbach, 1804-72) を知つたのは、いつであつたか？ 自叙伝『わが生涯』で見ると、ワーグナーにフォイアーバハを読むやうにすゝめた最初の人は、ドレスデン時代(一八四二―四九)の友人メッツドルフ (Metzdorf) であつた。

メッツドルフはカトリックの司祭であるが政治運動にも関心があり、四九年五月のドレスデン蜂起では、義勇軍の指揮に當つた。革命失敗後は、パリに亡命、そこで二十年を過し、一八七〇年八月、スイスのルツェルンの路上で、偶然にもワーグナーと再会してゐる。このメッツドルフがフォイアーバハのことを、「新しい時代の唯一・真正な哲学者」として、ワーグナーに推奨したのである。

しかし、『わが生涯』を読むと、ドレスデン時代に先だつて、パリ時代(一八三九―四二)に、友人のレールス (Samuel Lehrs, 1806-43) が靈魂の不死を疑問視してゐると云つて、ワーグナーを驚かしてゐる。こゝに、フォイアーバハの名まへは、直接には、出て来てゐないが、おそらくレールスは、この時すでに、フォイアーバハの著作を読んでゐたのであらうとも云はれる。(例へば、Gregor-Dellin: R. Wagner, S. 166) さうだとすると、ワーグナー

のフォイアーバハ体験は、通説よりも、少し遡ることになる。

フォイアーバハは、一八〇四年の生れであり、一八二九年からバイエルンのエアランゲン大学の私講師をしてゐたが、三〇年、二十六歳のときに、『死と不死についての思想』(Gedanken über Tod und Unsterblichkeit)と題する本を、ニュルンベルクの本屋から出版した。この本は、当時のキリスト教——それは、キリスト教そのものといふよりも、体制側に立つてゐたその頃のキリスト教会を、痛烈に批判したものであつたから、僧職者、神学者からの反発は、もちろん、世間一般からも危険思想とみなされた。本は匿名で出版されたのであつたが、その著者がフォイアーバハであることは、たちまち知れ渡り、そのために、フォイアーバハは、大学での教職につく望みを断たれてしまつた。事実、以後二、三度、友人や知人の世話で、大学教授の話もないではなかつたが、その度ごとに、この『死と不死』のために、話はまとまらなかつたのである。⁽¹⁾しかし、フォイアーバハは、これで抹殺されて了つたわけではな⁽¹⁾い。三七年以後ずつと、ニュルンベルク郊外のブルックヘルク(Bruckberg bei Ansbach)に引きこもつてゐたのであるが、四八年三月のウィーンとベルリンでの三月革命は、フォイアーバハにも影響を与へないではおかなかつた。「危険思想」が脚光を浴びる時代が来たのである。

(四八年) 五月、憲法制定とドイツ統一のために、フランクフルトに国民議会が開設された。議員はドイツ各地から選ばれ、大学教授、作家、法律家などが多かつたから、「教授議會」とも呼ばれた。フォイアーバハも立候補するやうにすゝめられたが、政治嫌ひだつたので、立候補は辞退してゐる。

このやうな社会の動きの中にあつて、ハイデルベルク大学の学生たちが、大学から追放された、この学者の講義をきゝたがつた。フォイアーバハのハイデルベルク大学教授就任は実現しなかつたが、その代りに、学生たちの要望に応へて、四八年十二月から四九年三月まで、ハイデルベルクの市庁舎の講堂で、宗教の本質についての連続講演が行

はれた。

この講演は、それ自体の意義のほか、ドイツ文学史上、特別に記憶されねばならない。聴講者の中に、のちに『緑のハインリヒ』の作者となるゴットフリート・ケラー (Gottfried Keller, 1819-90) がゐるからである。ケラーは、生れ故郷のチューリヒ市の奨学生として、丁ど、ハイデルベルクに留学中であつた。そして、ケラーがたゞ聞いたといふだけではない。これが契機となつて、それまでロマン主義の影響下にあつたケラーが、リアリスト・ケラーへと変貌したからである。詩的リアリズム誕生の日づけは、ハイデルベルクでの、ケラーとフォイアーバハとの出会ひの時であつた、とアンジユロスは『ドイツ文学史』の中に書いてゐる。〔ドイツ文学史、クセジュ文庫、白水社、一一一頁〕

(二) 死の認識

一八四九年五月、ドレスデンに起つた民衆蜂起は、ザクセンとプロイセンの軍隊によつて、たちまちの内に鎮圧された。この反乱への加担者ワグナーは、各地を転々と逃げ廻つたのち、七月、やうやくスイスのチューリヒに落ちついた。ワグナーは、すぐに、『芸術と革命』と題する評論を書いてゐる。これは、これからしばらくの間ワグナーが立てつづけに書く評論の第一作に相当する。

九月、ワグナーは、かねてメツツドルフからすゝめられてゐたフォイアーバハの『死と不死』を読むことが出来た。友人ミュラーの弟子で、ピアノ教師のバウムガルトナー (Wilhelm Baumgartner, 1820-67) が、この本をもつて来てくれたからである。

『死と不死』は、フォイアーバハの最初の著書であるが、ある作家の処女作が、よかれあしかれ、その作家の縮図

であるばあひが多いやうに、『死と不死』は、フォイアーバハ思想の端的な要約ともなつてゐるであらう。

フォイアーバハによれば、不死信仰は、現実の生活を仮のものとして見て、彼岸こそ真実とする。そのために、不死信仰は、世界の現状を認に傾く。なぜなら、諸悪に充ちた現実のこの社会が、仮の世界であるならば、いくらつらくとも、しばらくの辛抱にすぎない。その先には、明るい真実の世界が待つてゐるからである。かうして、不死信仰は、既成の社会の肯定となり、社会変革への芽をつみとつて了ふ。これに對して、不死信仰をすて、個人は、文字通り、死に、死後の彼岸の生活など、あり得ないと認識することが、現状の社会の悪を見つめ、現状の社会を変革するパネとなるのである。

「ただ仮死が存在するだけでなく、個体の生活を完璧に終わらせる実際の且つ真実の死が存在するということを認識するばあひにのみ、人間は新しい生活を再び始める勇氣をふるいおこし、且つ絶対的に真実なもの・絶対的に本質的なもの・実際に無限なものを自分の全精神活動の主題および内容にするという緊迫した欲求を感じるだろう。」

（船山信一訳、『フォイエールバッハ全集』第十六卷、一三頁、福村書店）

不死信仰が、現世を仮とし、来世こそ真実とする、この逆転現象を、フォイアーバハは次のやうに説明する。

「主観は自分自身のなかで単に平板且つ空虚であるにすぎないが故に、単に現実的世界の影・表層的な外觀を知つてゐるにすぎない。主観は世界の影を世界そのものとして受け取つてゐる。それ故に主観にとつては眞の現実的な世界が単に影または将来にかんする夢像にすぎない。」（同書、一一頁）

フォイアーバハにあつては、個人は死ぬが、類としての人間、つまり、人類は不滅なのである。

「あなたの死後には他の人々が残存し、あなたの本質すなわち人間性があなたの死によって毀損もされず縮小もされないで残存している。人間そのものは永遠であり、精神そのものは永遠であり、意識そのものは不滅なものであり無限なものである。……特定の人格としてのあなた自身——すなわちただ意識の客観であるだけであつて自分自身が意識であるのではないあなた自身——は必然的にいつか意識の外に出て行き、あなたの代わりに新しい新鮮な一人格が意識の世界のなかに入って来る。」(同書、九三頁)

『死と不死』において、フォイアーバハは、「愛」を人間存在に必須、または、必然のものとし、死は「愛の最後の確証」(二二頁)であると云つてゐる。

人は愛することによつて、自分だけのための孤立した存在ではなくなり、愛する対象の中に生きる。愛するとは、自分を相手に与へることであり、精神的な自己放棄である。つまり、人は愛することによつて、孤立した存在としての自己は死ぬのであるが、まさにそのことによつて、永遠に生きるのである。

「人間のあらゆる行為は愛から導き出され、人間のあらゆる行為のなかに愛が見出され且つ認識される。人間がただ自分自身だけで(孤立して)存在するということは不可能である。……存在するものは必ず他者と共に存在しており他者のなかに存在しており他者に対して(他者のために)存在している。」(同書、一七頁)

「私は愛することによってもっぱら他者のなかに存在し、他者と共に存在し、他者に対して（他者のために）存在している。……あらゆる愛、またはあらゆる種類の愛は、それらが自己放棄であり自己犠牲であるということと共に有している。」（同書、一八頁）

「死は、まさに死があなたの△あなたのための存在√の顕示であるという理由によって、同時に、愛の顕示なのである。死においてあなたの孤立存在（あなたのための存在）が現勢的に現われる。しかしまさに、この自己孤立化の瞬間には死んでおり無であるということ、すなわちこの自己が対象なしに存在しようとする瞬間にはこの自己は存在しないということのなかでこそ、死は愛の顕示——あなたは単に対象のなかに且つ対象と共に存在することができるにすぎないという顕示——であるのである。」（同書、二三頁）

「あなたが存在するのはただあなたが愛するばあいだけである。……しかし同時に愛においてはあなたの人格的現存在すなわちあなたの引きはなされた△あなたのための存在√が亡びるのである。」（同書、三二頁）

（三） フォイアーバハへの感謝

フォイアーバハが、『死と不死』で主張した思想は、人々に社会変革を促すものであったから、当時の社会から危険思想と見なされ、その結果として、フォイアーバハは、生涯、公職につくことは出来なかつた。それで、フォイアーバハは仕方なく、田舎に引きこもり、著述生活をつゞける。四一年に、主著『キリスト教の本質』、四三年には、『将来の哲学の根本命題』、そして四六年から自分の手になる全集の刊行を開始してゐる。四八年夏には、フランク

フルトに出かけ、例の国民議会には出なかつたが、この国民議会を不満とする「民主々義者会議」に出席してゐる。たゞし、ほとんど発言はしなかつたといふことである。同年の十二月からは、ハイデルベルクでの連続講演がある。

一八四八年、「それはヨーロッパのほとんどすべての国や地域や民族が、紛争と反乱、革命と戦争のなかに巻き込まれた年であつた。」(河野健二『現代史の幕あけ』、岩波書店、三頁)まづ、フランスの二月革命、ウィーンとベルリンでの三月革命、六月には、チェコのプラークでの暴動などく。このやうな社会情勢が、公職(大学教授)からしめ出されたフォイアーバハを、まさに「公職からしめ出された」がゆゑに、フランクフルトにつれ出し、ハイデルベルクでの講演となつたのである。そして、この講演は、聴衆に多大の感銘を与へた。少なくとも、聴衆の一人であつたゴットフリート・ケラーには、大きな影響を与へた。

フォイアーバハとケラーとの出会ひが、文学史にされるほどになつたのは、それが、二人の個人的な出会ひといふやうなものではなく、時代の状況の中で生れたものだからである。仮に、ケラーが、フォイアーバハの同じ講演を、十年早くきいてゐたなら、それは、ケラーの心にあまり残らなかつたであらうし、あるいは、より少なくなしか、その痕跡をとゞめなかつたであらう。ブルックベルクの田舎からフォイアーバハを、引張り出したのも、フォイアーバハの講演から、詩的リアリズムが生れたのも、時代のなせる業であつた。

ワグナーがフォイアーバハを読んだのは、四九年の九月であり、その時のワグナーが身をおいてゐた社会情況は、以上のやうなものであつた。ワグナーはフォイアーバハを、読むべくして読んだと云へる。ワグナーにフォイアーバハをすゝめたのは、メツツドルフであつたが、メツツドルフからすゝめられなくとも、おそらくワグナーはフォイアーバハを読んだであらうと思はれる。ワグナーは、時代からの影響を、とりわけ強く受けて来た人だからである。

ワグナーはフォイアーバハを、「権威主義的な観念の抑圧からの解放をもたらす代表者」(『わが生涯』Gregor-Delin 編 S. 443)と云つてゐる。ワグナーは、つゞいて、『キリスト教の本質』も読んでみたが、これにはあまり興味をもてなかつた。しかし、ワグナーがフォイアーバハを、どれだけ重要視したかは、(四九年)十一月完成の著述を、フォイアーバハの *Grundsätze der Philosophie der Zukunft* (『将来の哲学の根本命題』)に倣つて、*Das Kunstwerk der Zukunft* (『未来の芸術作品』)と題したことからも分る。たゞ、そればかりではない。『未来の芸術作品』に、ワグナーはフォイアーバハへの感謝の辞を序文としたのである。

「先生、ほかならぬ先生にしか、私はこの著作を捧げることが出来ません。なぜなら、この著作によつて、私は先生に先生の財産をお返し、たからです。たゞ、先生の財産であるのみならず、芸術家の財産となつたかぎりでは、私が先生に対して、どう振舞つたらいいのか、迷つてゐる次第です。つまり、先生が哲学者として与へたものを、芸術家の手から、再び受けとる気持がおありか、どうかです。いづれにしても、私のこゝろを元気づけてくれたことに対する感謝の気持をあらはしたいといふ衝動と責務感とが、私の迷ひを凌駕しました。……」

『未来の芸術作品』において、ワグナーは、まづ、「舞踏」と「音楽」と「詩歌」とを、「純人間的な三つの芸術」といふ。この三つは、もと／＼生れながらの三姉妹であつたといふのである。ところが、エゴイズムによつて、人間の社会が、バラ／＼になつたと並行して、これら三つの芸術も、いまや、はなれ／＼になつてしまつた。人間が愛によつて、エゴイズムを克服して、エゴイストからコムニスト(共同体的人間)になるやうに、これらの芸術もまた、それ／＼の孤立から救済されて、これら三つが再結合し、未来の芸術とならねばならぬ、としてゐる。

この論調の根底には、フォイアーバハと通ずるものが多いことは、明らかに認められる。愛とか、自己放棄による孤立からの脱出とか、個の上に、より価値あるものとしての、つまり、「類」といふやうな概念の設定など。更にまた、この鳥瞰的視点からよりも、具体的な文章によつて比較する方が、一そう分りやすいかもしれない。『未来の芸術作品』には、フォイアーバハの著書の中に、まぎれ込ませても、区別のつかないやうな個所が見られる。

「人間にとつて、自分自身よりも、より高いものは、たゞ一つ、それは人間の類、人間の全体である。人間は、愛の欲求（生の欲求のうちで最も重要なもの）の満足、たゞ与へる、ことによつて得るのである。しかも、自己放棄によつて、他の人間に、最高の状態においては、人間一般に、与へることによつてある。」（記念版全集 VI-S. 37）

これは、フォイアーバハが、個人は死ぬが、人類は不朽の青春を謳歌し、それを信ずることこそ、真の不死信仰であると云つたのと同じである。

「孤立せる者は、不自由である。何故なら、愛なきために、制約され、従属的であるからである。共同体的なる者は、自由である。何故なら、愛あるために、制約されず、従属的でないからである。」（VI-S. 37）

「人間と同じやうに、人間から出て来たもの、又は、派生して来たもの、一切は、愛なき場合は、自由ではない。自由とは、叶へられた必然的欲求であり、最高の自由とは、叶へられた最高の欲求である。しかも、最高の人間的欲求とは、愛である。」（VI-S. 38）

これなど、フォイアーバハの「人間のあらゆる行為は愛から導き出され、人間のあらゆる行為のなかに愛が見出され且つ認識される……」の写しと云つてもいいのではないかとさへ思はれる。

しかし、フォイアーバハから、『未来の芸術作品』への影響は、以上にとゞまらない。ワグナーは、未来のあるべき芸術を、たゞ所謂「総合芸術」としたゞけではなかつた。芸術は、現在、営利目的の娯楽、奢侈となつてゐるが、未来のあるべき芸術は、人類の祝祭とならねばならぬ。そして、そのやうな未来の芸術を創造する未来の芸術家は、とりもなほさず、民衆である。

営利目的の娯楽となつてゐる芸術を、人類の祝祭とするためには、一体、どうしたらよいか。社会の変革である。芸術も社会の産物であるから、あるべき芸術は、あるべき社会においてしか求められない。ワグナーが革命を讚美し、革命に参加する理由は、こゝにあるのである。フォイアーバハの『死と不死』が危険思想とされたのは、それが社会変革をうながす思想だつたからである。ワグナーはフォイアーバハから、革命への共感と期待と信頼とを受けついたのである。

(四) 『ジークフリートの死』と『ナザレのイエス』

ワグナーとフォイアーバハとの関係は、たゞ『未来の芸術作品』だけに限定されるものではない。ワグナーが、四八年／四九年当時、最も力を注いでゐたのは、『ジークフリートの死』であつた。これが後には、『ニーベルングの指環』四部作にまで拡大して行くのである。

ワグナーが『ニーベルング神話——ドラマの草稿として』といふ小文を書いたのは、一八四八年十月四日、そして十月二十日には、『ジークフリートの死』の散文章稿が出来、十一月末には、台本がおう完成。ワグナーは、

翌年五月、革命に失敗、各地を転々としたのち、何とかスイスのチューリヒに落ちつくのであるが、その間にも、この『ジークフリートの死』の原稿をもち歩き、人々を集めて、そのまへで朗読してゐる。

一八四八年の初稿『ジークフリートの死』で見ると、ジークフリートは、ワルキューレ姿のブリュンヒルデに導かれて、炎の中から天上へ昇つて行くやうになつてをり、『ニーベルンゲン神話——ドラマの草稿として』そのまゝである。しかし、この『ジークフリートの死』は、『神々のたそがれ』と改題されるばかりでなく、内容にもかなりの改変が見られる。

一八五一年十月、『指環』四部作の構想が成り（十一月二十日、リストあて書簡）、五二年十二月十五日には、全四部の台本が完成し、これは、五三年二月十一日、私家版として出版された。この時、今の『ジークフリート』は、まだ『若いジークフリート』であつたし、『神々のたそがれ』は『ジークフリートの死』であつた。現在のやうに、『ラインの黄金』、『ワルキューレ』、『ジークフリート』、『神々のたそがれ』となるのは、一八五六年であるが、五三年版の『ジークフリートの死』は、もう既に現在の『神々のたそがれ』とほとんど同じ内容になつてゐる。しかし、そこには、普及版テキストには除かれてゐる部分が入つてゐた。

ブリュンヒルデの最後のことばの中で、

「……

かうして私は火をつける

ワルハルの美しい宮殿に。」

の次に、以下のテキストがつづいてゐたのである。

「花咲ける生命の

種族よ、

私がお前たちに云ふことを

よく／＼お聴き。

もえさかる炎によつて

ジークフリートとブリュンヒルトが

やきつくされるのを見、

ラインの乙女たちが

深みへ指環を誘ひ込むのを見たなら

さあ、夜を通して

北の方をご覧。

そこには神聖な炎が輝いてゐる。

そして、お前たちは皆、知るがい、

お前たちがワルハルの終りを

見守るのだといふことを。

神々の一族は

霞のやうに消え去つた。

支配する者なき世界を

私は置いて行く。

聖なる知識の宝を

私はこの世に残して行く。

財貨でもなく、黄金でもなく

神々の壮麗さでもなく

家でもなく、屋敷でもなく

素晴らしい装飾でもない。

暗い取決めでもなく

欺き騙す誓ひでもなく

偽善に充ちた道徳の

敵しい掟でもない。

喜びにつけ、悲しみにつけ

幸なるもの、それは、たゞ愛なのです。」

五三年版のワグナー手扱本には、このところに削除のしるしがついてをり、末尾に「作曲から除外、七二年四

月十日」とコメントがついてゐる。七二年は、ワーグナーが、この作品の作曲スケッチを作つてゐた時である。この部分は、四八年の初稿『ジークフリートの死』にはなく、五三年版で入つたのであり、フォイアーバハの『死と不
死』読書後の改稿である。

ワーグナーは『指環』の結末をいろ／＼と思ひ悩み、さまざまの稿を残した。引用した本文は、それらの複数の結末の一つであり、通常、楽観的・フォイアーバハ的世界観を示してゐると云はれてゐる。これは、ワーグナーがフォイアーバハの著作に親しんだのちの加筆であるから、時間的にも、首肯させる。

このブリュンヒルデのことばでは、取決め（契約）とか、誓ひ（誓約）とか、掟（法）などが、「暗い」、「欺き騙す」、「偽善」としてしりぞけられて、「愛」こそ最も貴いものとされてゐる。ワーグナーのこのやうな考へは、こゝだけに単発に見えるのではない。一八四九年一月、ワーグナーは、かなり長文の作品草稿『ナザレのイエス』を書いてゐる。これは、結局は、作品にまで完成しなかつたのであるが、ワーグナーの思想過程を知る上で見逃せないものである。その中で、イエスは社会改革者として登場し、掟によつて罪が生ずるのであり、掟なければ罪なく、掟の対立としての愛の貴さを説いてゐる。このあたり、ブリュンヒルデの最後の歌そのまゝと云つてもいい。更に、イエスは、愛と死について、

「私の死によつて、掟は消える。私は掟よりも、愛が貴いことをお前たちに示してゐるのだから。」（記念版全集

II-S, 233)

と云ふ、

「個の生活の共同体への最後の解消は、死であり、死こそ、エゴイズムの最後の、最も確実な止揚である。」(H-S. 243)

とも云つてゐる。

以上、見て来たやうに、第一に、『未来の芸術作品』の中心主題、第二に、『指環』の複数の結末の一つ、第三に、『ナザレのイエス』のテーマは、ほとんど同じであり、それは、フォイアーバハの思想に重なる。だからこそ、ワグナーは、『未来の芸術作品』の序文で、「ほかならぬ先生にしか、私はこの著作を捧げることが出来ません。なぜなら、この著作によつて、私は先生に先生の財産をお返し、たからです」とまで書いたのである。

(五) チェーンバレンの解釈

しかし、それでは、ワグナーは、フォイアーバハ思想の、単なる芸術版だつたのであらうか。一人の思想家なり、芸術家が、偉大な存在となるためには、本人自身の能力・努力もさることながら、その思想、その芸術の宣伝・普及に努める使徒が必須である。キリスト教や仏教にしても、教祖の仕事は、素朴であり、単純である。それは、発生しては、泡沫のやうに消える無数の新興宗教と、大して変りがない。しかし、キリスト教や仏教の偉大さは、キリスト教で云へば、十二使徒、仏教では釈迦十大弟子をはじめとして、その後、数へきれないほどの多数の神学者、仏教学者による「加上」があつたればこそである。ワグナーの周りにもまた、ワグナー・グループといはれる人々がゐた。例へば、ワグナーの龐大な伝記を書いたグラッセナップ(Carl Fr. Glasenapp, 1847-1915)、ワグナーの娘エーファ(Eva)と結婚したチェーンバレン(Houston Stewart Chamberlain, 1855-1927)など。そのチェー

ンバレンの書いた『リヒアルト・ワグナー』(Richard Wagner, 1896)は、グラッセナップの著した伝記と並んで、それこそ汗牛充棟のワグナー文献の中の基礎の基礎となつてゐる。もちろん、グラッセナップやチェーンバレンの著書は、ワグナーの宣伝、ないしは、神聖化を目ざしてゐるから、その点、割引して読まなければいけないと云はれてゐるけれども、物事を見るのに、客観的、中立の立場などがあるかどうか、から考へねばならない。人文・社会科学において、ある事象を切ることは、何らかの方向に切るのであり、切る方向によつて、事象は、さまざまの面を見せてくれる。方向なくして、切ることは出来ない、とマックス・ウェーバーは指摘してゐるが、最近では、自然科学においてさへ、観測そのものが、観測される対象物に影響を与へると云はれる。かうなつてくると、チェーンバレンの偏見に充ちた著書もまた、「偏見」のゆゑに、価値を落すものではない。なぜなら、その後の無数のワグナー文献も、ことごとく、それ／＼の偏見の所産だからである。

チェーンバレンは、『リヒアルト・ワグナー』の中で、フォイアーバハのワグナーへの影響を、極めて小さく評価してゐる。

「チューリヒ時代のワグナーの著作にはフォイアーバハとの単なる一般的な接触が見られるのみであつて、何ら真の哲学的接触は認められない。」(Richard Wagner, S. 135)

と、チェーンバレンは云ひ、また、かうも書いてゐる。

「要するに、フォイアーバハは、ワグナーの概念を明確にしたといふよりは、むしろ、混乱せしめた。」(S. 136)

チェーンバレンによれば、「フォイアーバハは、ワーグナーの思想のために、二、三の用語 (Formel) を提供したにすぎない」のに対し、ショーペンハウアは、ワーグナーに一つの形式 (Form) を与へたとしてゐる。チェーンバレンは、フォイアーバハとワーグナーとの繋がりを、出来るだけ軽く見たかつた。ショーペンハウアからワーグナーへの影響は大きかつたが、しかし、フォイアーバハからの影響は、小さかつた、とチェーンバレンは云ひたかつたのである。なぜ？

チェーンバレンは、一八五五年生れのイギリス人であるが、のちドイツ人となつた。この人は、人種論者であり、一八九九年に出版した『十九世紀の基礎』(Die Grundlagen des 19. Jahrhunderts) は、ナチスの人種論に大きな影響を与へたと云はれる。ワーグナーとチェーンバレンの関係はと云へば、チェーンバレンは、一八八二年、バイロイトでワーグナーと面識をもち、一九〇八年には、ワーグナーの次女エーファと結婚、ワーグナーについては、『ワーグナーの劇作品』(Das Drama Richard Wagners, 1892) と『リアルト・ワーグナー』(Richard Wagner, 1896) とを書き、ワーグナーの「神聖化」につとめた。一九二三年五月、ヒトラーは、バイロイトのワーグナー旧居ワーンフリートを訪れた。そこで、ヒトラーを迎へたのは、ワーグナー未亡人コージマ、息子ジークフリートとその妻ヴィニフレットなどであつたが、女孀チェーンバレンもその中にゐて、チェーンバレンは、この未来の總統から強烈な印象をうけ、たちまち、ヒトラー崇拜者となつた。ナチスはワーグナーを利用したが、ワーグナーとナチスとが結びつく上で、ワーグナーの著作の中に「国粹的」(volkisch) 傾向を指摘したチェーンバレンのワーグナー論が、大きな役割を果してゐるのである。

このやうなチェーンバレンが、フォイアーバハを好む筈がない。フォイアーバハは、哲学史によれば、ヘーゲル左派に属する。マルクスは、一般には、ヘーゲルから弁証法を、フォイアーバハから唯物論を撰取し、弁証法的唯物論

を構築したと云はれる。ナチスが、ユダヤ人と共に最も嫌つたのは、マルクス主義であつた。ナチスの宣伝ピラには書いてある、「マルクス主義は死ぬ、社会主義が生きたるために！」チェーンバレンは、その思想的立場からして、当然のことながら、ワグナーとフォイアーバハとの關係を出来るだけ希薄にしたかつたのであり、その反動として、シヨールペンハウアからの影響を強調したのである。

しかし、チェーンバレンのワグナー解釈は、思想上からの偏向として、簡単に捨て去られていゝものなのか、どうか。

(六) 革命と愛

ワグナーとフォイアーバハとの一致点は、まづ第一に、社会の現状打破と改革であり、さうして、次に、愛の問題である。一般には、とかく、後者、愛についてのみ重視されがちであるが、革命への意蘊は、それ以上に重要であると思はれる。

『ニーベルングの指環』は、制作に二十六年もかゝつたので、その間に、作者ワグナーの考へが變つてしまひ、改稿の跡がいちぢるしい。しかし、単純化して云へば、それは、フォイアーバハ的からシヨールペンハウアの改作であつた。フォイアーバハ的とは、先に引用したジークフリートの犠牲によつて、愛の世界が実現するといふブリュンヒルデの別れのことばのみをさすのではない。ワグナーが、はじめに構想したのは、この墮落した社会は、革命によつて、一切が善くなる、といふのであつた。これこそ、フォイアーバハ的である。しかし、ワグナーは、のちに、この考へを變へ、革命によつて出来る新しい社会は、旧の社会と同じやうに悪い、としたのである。これが、シヨールペンハウア的といはれる構想である。

ワグナーが革命に共鳴したのは、早い。一八三〇年、ワグナーは十八歳で、ギムナジウムの生徒であつたが、この年の夏、フランスに七月革命がおこり、国王シャルルはイギリスに亡命した。ワグナーは、『わが生涯』の中で、この七月革命にふれて、「もちろん、わたしはこの革命に大賛成だつた」(S. 47)と書いてゐる。

この七月革命は、ヨーロッパ各地に波及し、その中の一つ、ポーランドのワルシャワでも民衆の蜂起があつた。ナポレオンの作つたワルシャワ大公国は、ウィーン会議で消滅、その後、ポーランド王国が成立したが、ロシア皇帝がポーランド王を兼ねてゐた。ワルシャワの革命政府は、ロマノフ王朝の廃止を宣言するが、しかし、間もなく、ロシア軍がワルシャワを占領して、ポーランドの蜂起は終つた。この時も、ワグナーは、ポーランドの人民が、短時日にもせよ、戦ひとつた成功に驚喜してをり『わが生涯』(S. 66)、革命失敗後、それに参加した大勢の人たちが、フランスへ亡命の途次、ワグナーの住むライプツィヒを通つて行つたが、ワグナーは、その人たちの宿泊所をたづね、会話までもつてゐる。ワグナーは十九歳であり、十九の少年にしては、大へんませた行動だつたと思はれる。一八四八年、パリに二月革命がおこつた。国王ルイ・フィリップはイギリスへ亡命。革命の結果、国営工場がつくれ、世界初の社会主義体制が出現した。この二月革命は、ウィーンの三月革命となり、ウィーン体制の指導者メッテルニヒは追放された。ワグナーは、早速、『ザクセンからウィーンの人々への挨拶』と題する長篇の詩を作つて、それをオーストリアの新聞に載せ、この革命を讚美してゐる。

さうして、ドレスデン蜂起が来る。四八年六月十四日、ワグナーは急進的な政治団体「祖国結社」において、演説をおこなひ、『共和主義の運動は王権に対して、いかなる関係にあるか』、そこで、ワグナーは貴族階級の廃止を訴へた、めに、政府の要注意人物となつた。

この時、ワグナーは宮廷劇場の第一指揮者であり、いはゞ、ザクセン王室にかへられてゐる体制内の人物であ

つた。それが、このやうな反体制的な発言をしたのである。制裁措置は、迅速だつた。たゞちに、『リエンツィ』は、レバートリーからはげされ、十二月に初演予定だつた『ローエングリン』の上演もまた中止となつた。

ワグナーのもとで、宮廷劇場副指揮者をしてゐたレツケルは、政治運動のために、その地位を解雇されたが、レツケルは革命家に徹する決心をし、「民衆新聞」と題する週刊新聞を発行して（四八年八月以来）、民衆の煽動にのりだしてゐた。ワグナーは、この新聞に、匿名で、三つの記事を書いてゐるが、中でも、四九年四月に発表された『革命』と題する文章は、「アジびら」と云つてもいいやうな激烈なことばで書かれてゐる。それは、

「われ／＼には分つてゐる。古い世界、それは崩壊し、そこから新しい世界が誕生するのである。なぜなら、崇高な女神へ革命は、嵐の翼に乗つて轟然と羽音をたて、やつて来る。……」

と始まり、さらに、「革命」からの挨拶として、「強者と法律と財産」の粉碎、「一人の人間が、他の者を支配する一切の支配権」の粉碎を主張してゐる。

『革命』が新聞に載つたのが、四月八日、そして、あのドレスデン蜂起は、五月三日に勃発、ワグナーのそれへの参加、亡命とつゞく。

ワグナーが、フォイアーバハの『死と不死』を読んだのは、四九年九月、亡命先のチューリヒにおいてである。ワグナーの革命への関心、革命によつて一切は善くなるといふ革命への期待は、フォイアーバハを知るよりも、ずっと以前からのものであつた。約二十年もまへから、ワグナーは革命を求めてゐたのであつたし、革命讚美の作品『ジークフリートの死』も、『死と不死』を読む半年も以前に、一おう、完成してゐたのである。実際に革命への参

加時点でも、まだフォイアーバハを読んでゐない。かう見て来ると、ワグナーが、『ジークフリートの死』において、墮落した社会は、革命によつて一切が善くなるとしたのは、フォイアーバハからの、単なる影響と云つてしまつていゝものであらうか。

しかし、また、かうも考へられる。フォイアーバハからワグナーへの影響は、革命肯定よりは、むしろ、愛の認識ではなかつたのか。フォイアーバハは、愛を、人間存在に欠く可からざるものとし、「死は愛の最後の確証」であると云つてゐるが、この点においてもまた、ワグナーは、すでに、一八四一年の『さまよへるオランダ人』、四五年の『タンホイザー』などの中で、そして、先に内容についてや、立入つて検討しておいた『ナザレのイエス』（四八年）でも、死が愛の最も確かなしるしであることを、はつきりと示してゐる。

(七) 四八年前後

それでは、フォイアーバハとワグナーとの一致は、一体、どう説明すればよいのか。

フォイアーバハの著書『死と不死』は、一八三〇年の出版当時、危険思想と見なされ、そのために、フォイアーバハは公職から締め出されたのであつたが、四八年から四九年にかけてのハイデルベルクでの連続講演は、学生の希望によるものであつた。時代が、フォイアーバハを求めたのである。ケラーとフォイアーバハとのこの時の出会いが、詩的リアリズム誕生の日とされるのも、たゞケラーが、フォイアーバハの講演をきいたから、さうなつたのではなく、まさにさうなるやうに、時代が用意したのであつた。

フォイアーバハとワグナーとの一致、ないし、類似は、フォイアーバハからワグナーへの影響といふよりも、より多くは、時代からの影響と云つてもいゝであらう。二人とも、同時代に生きる者同士として、同じやうに考へた

のである。

一八四八年は、ヨーロッパ史にとつて、一つのメルクマールの年にあたる。この年を頂点に、ヨーロッパの革命熱は燃え上つた。フォイアーバハも、ワグナーも、墮落・腐敗した旧社会の变革を期待し、来るべき新しい社会は、個のエゴイズムが共同体へと止揚される愛の社会を夢みたのである。以上の観点に立つ時、ワグナーはフォイアーバハから「二、三の用語」を借用したにすぎないといふチェンバレンの主張は、十分に肯定出来る。

一般に、哲学者や思想家からの作家への影響といふ場合、かうしたものが多くであらうと思はれる。さうでなければ、作家は哲学者や思想家の傀儡となりさがつて了ふ。作家は哲学者の僕しもではない。ワグナーに大きな影響を与へたもう一人の哲学者ショーペンハウアとワグナーとの関係も、フォイアーバハとのそれに等しい。ワグナーがフォイアーバハの著書を読んで、その中に、自分の考へと同じものを見つけて、我が意を得たり、と大いに力づけられたと同様に、ワグナーはショーペンハウアの『意志と表象としての世界』を読んで、共鳴する思想を発見し、驚喜したのであつた。

注

(1) 但し、エアランゲン大学の私講師は、三八年までつゞけてゐる。

(2) 『ドイツと諸侯』四八年十月十五日、『人間と現在の社会』四九年二月十日、『革命』四九年四月八日。

R. Wagner und Feuerbach

Yoshihiro Ito

R. Wagner las 1849 in Zürich, wohin er wegen seiner Teilnahme an dem Dresdener Aufstand emigriert war, Feuerbachs *Tod und Unsterblichkeit*. Es wird im allgemeinen anerkannt, daß Wagner von dem Philosophen stark beeinflußt worden ist. Gewiß kann man in Wagners Schriften einige Begriffe finden, die mit denen von Feuerbach übereinstimmen, d. h. Hoffnung auf die Revolution, „höchstes Sein: gemeinschaftliches Sein“ und „der Tod: die letzte Bewährung der Liebe“ usw.

Doch hatte Wagner schon vor seiner Kenntnis der Abhandlung Feuerbachs solche Anschauungen. Wagner und Feuerbach hatten ihre Mitwelt gemeinsam. Der Zeitgeist des 19. Jahrhunderts, in dem sie lebten, übte auf beide Einfluß aus. Sie hatten also ähnliche Gedanken über die Welt. Wagner ist kein Nachahmer der Ideen Feuerbachs. Der eine drückte sie künstlerisch aus und der andere philosophisch.